

## 山に親しみ山に想う (6)

### — 路傍の馬頭観音 —

<文・写真> =岡本=

登山を趣味とする人で馬頭観音を知らない者は、まずいないと思う。特に、田舎のバス停から集落を経て里山に入る低登山を旨とする自分のような者にとって、馬頭観音は山歩きの度毎に幾つも出逢うことのある親しみの対象である。これまで多くの馬頭観音を見てきたのに、「馬頭観音とはどんなものなのか」と自問してみると、知っているようで、実はあやふやなものであることに気付いた。そこで、関連の山行記録メモや写真を改めて探索するなどして、自分なりの「馬頭観音」像を纏めておくことにした。

これまでの山行で見た多くの馬頭観音は、峠や峠越えの山道、集落の路に佇むもので高さ1メートル程、幅も50センチ程の、自然石に少し手を加え、馬頭観音(観世音)と陰刻しただけのものが多かった。石像ではなく石碑が多い。素人に少し毛の生えた石工が刻んだような稚拙で素朴な作りからすると、往時の庶民某が施主したものとみられる。そんな馬頭観音には、刻んだ年月と施主の名前も刻まれている。造立の時期としては江戸後期、明治、大正、昭和前期のものを見たことがある。鎮座している所は前述のとおりであるが、本来佇んでいた所から市道や県道などの道路肩に移され、他の石像や石碑と共にまとめられていることもある。

これまでの山行で印象に残っている馬頭観音を幾つか挙げてみる。  
本厚木駅から南山、権現平に行った際、鳥居原園地の広場に石柱サークル址のように多くの馬頭観音が円形に並べられてあった。同じ山行で、半原バス停近くの県道端に七基程並べてあった(写真略)。(2011. 3. 5)



九鬼山に登った際、田野倉駅近くの国道端に馬頭観音、道祖神、六臂の石仏が仲良く並んでいた(写真①)。(2010. 9. 11)

写真-1

大野山より下山途中で見た馬頭観音には大正6年、施主岩本の名前が見え、碑の上部に狐のように見える馬の顔が浮彫されていた(写真②)。

同じく別のところでは馬蹄が供えられていた(写真略)。(2010. 12. 4)



写真-2



浅間尾根の数馬分岐で馬頭を冠した柔和相の立派な舟形光背付き馬頭観音を見た(写真③)。この立派さは浅間尾根の荷駄馬利用の盛んだったことを窺わせるものだろうか。

(2010. 1. 30)

写真-3

高川山への山行の際、初狩、上大月、田野倉の三方向分岐で馬頭観音の石碑一基と馬頭を冠した柔和相の馬頭観音像三体が並び、像には新しい人参が供えられていた(写真④)。(2010. 6. 20)



白山、日向山、日向薬師への山行の際、七沢の車道端で昭和27年造立、施主黄金井与平の板状の馬頭観音碑をみたが、その近くに運輸業を業種とする黄金井産業の看板を見た。

与平さんの子孫が馬から車に変えて運輸を生業にしているのであろうと想像した(写真⑤)。また、同じ山行で順礼峠越えの際、極めて珍しい「牛供養塔」を見つけた(写真⑥)。これは所謂「牛頭観音」とも言うべき石碑である。(2011. 2. 19)



渋沢丘陵、頭高山への山行の際、丘陵の道で江戸期安政7年(1859年)造立のものを見た(写真⑦)。丘陵の道には外観がこれより古そうなものが沢山あったが、表面が剥落しており読み取れなかった。(2011.1.29)



2009年11月に「奥多摩むかし道」を水根から奥多摩駅に歩いたことがある。

むかし道は旧青梅街道をなぞった道で、往時は小河内辺りの物産を搬出するのに利用され、江戸時代からの信仰、生活の息吹を伝える遺物が多く残っている。むかし道には、馬頭観音、道祖神は勿論、牛頭観音(写真⑧)もある。むかし道では牛も荷駄の運搬に多用されていたので、馬頭観音の存在に便乗して、仏教上では存在しない牛頭観音を創造したものとみられ、庶民の

柔軟な思考と信仰が垣間見られて何やら微笑ましく思われる。

明治30年に著された「小河内探勝記」によれば「…牛馬の背荷を輸出しての帰途に会う30余頭…岩壁に付して…通過を避く…婦女の牛を使役…多し…」(奥多摩町教育委員会の案内板)とあり牛も使役されていたし、牛馬と擦れ違うために岸壁に身を寄せなければならない程に道が狭いので多くの牛馬が谷底に転落死したようである。



これまで列記した馬頭観音は民間信仰の馬頭観音碑や像であるが、では民間信仰の上流の「源頭」はどんなものだろうか。馬頭観音は仏教上の六観音(聖、十一面、千手、如意輪、不空羅索、馬頭)の一つである。観音菩薩は迷える一切の衆生を救済するため様々に姿を変えろという。迷いから脱却できない衆生は、六道(天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道)の間を輪廻することになるが、その畜生道に居る衆生を救済してくれるのが、馬頭観音に姿を変えた観音様という。人間道に居る我々人間の担当は不空羅索観音であり、地獄道に堕ちた衆生は聖観音が担当しているという。端的に言えば、衆生は解脱して仏になるまで六種の迷界を輪廻するという六道輪廻思想に基づいて六観音が考えられた。馬頭観音のイメージは、濁水を飲み尽く

し、雑草を食い尽くすように畜生道で迷う衆生の煩惱を断つとするものである。

六道輪廻思想は、お釈迦様(ゴータマ・ブツダ)の教えが濃厚に反映した原始仏典にはない思想であるが、仏教の体系化が進んだ後代、日本では11世紀頃から広まったといわれる。本来の馬頭観音は、馬頭の飾りを冠した人面で忿怒の相をしているのが典型である。人面は三面が多く、手は六臂、八臂などもあって種々である。典型的な馬頭観音は写真⑨のように忿怒相であるが、民間信仰の馬頭観音は、これまで見た限りでは全て柔和相であった。近世に入り、馬による物産の輸送が盛んになって、経済活動における輸送手段としてなくてはならなくなった役馬の病気予防と治癒、安全を祈願し、また死馬の供養のために、「馬の観音様」という語呂からも馴染みやすい馬頭観音の法力を藉りようとして馬頭観音が広く民間に信仰されたとみられる。

峠や峠越えの山道、集落の路で見る馬頭観音は、民間信仰のものであるが、この馬頭観音の石碑(石像)は、いつ頃から造立されたのであろうか。自分が写真で確認できたものは、上述の通り、安政7年(1859年)であるが、風化して刻印が判読できないものも多かったので、19世紀半ばから相当遡るかも知れない。

奥多摩むかし道の「さいかちぎ」の古木の向いに1816年造立のものがあるというが、写真は撮り逃した。新しいものとして、確認できたものは、上述した昭和27年のものである。ある山行のバス待ちの際に、集落の古老から昭和30年代まで山で炭を焼いて運んだと言っていたのを聞いたことがある。また、西沢溪谷の三富村から塩山駅への木材搬出の例をみると、昭和37年頃まで木材搬出のためのトロッコの引き上げは馬に頼っていたが、昭和40年代になると道路が整備され、車輸送に変わって馬は不要になったと言われる。山間部まで車道、林道が整備されだす昭和30年代から40年代頃まで馬が重用されていたことからすると、30年代にも馬頭観音が造立されていたとも考えられる。今後も気をつけて観察したい。

翻って、築地市場傍の波除神社に、活魚塚、海老塚、玉子塚がある。上野不忍池の弁天島にスッポン、フグ、包丁などの供養塔がある。御恩を被った生き物に対して供養するだけでなく、包丁供養や針供養など無生物に対してまで回向(仏事を営んで死者の冥福を祈ること)するのは、馬頭観音を造立した民間信仰と通底する日本人の生命観、宗教観ではないだろうか。山川草木や生類などすべてに仏性があるとする考え(一切悉有仏性説・いっさいしつうぶっしょう)が平安仏教(天台宗、真言宗)以降に大勢となったことが背景にあると言われる。



実は、浅草に立派な馬頭観音がある。浅草寺の駒形堂(駒形橋の橋詰、雷門二丁目)の本尊は三面六臂の馬頭観音である(他方、浅草寺観音堂の本尊は聖観音)。浅草寺が作成した案内板には「昔、この辺りは船着き場で渡し舟や船宿もあり、大変な賑わいをみせ、船で浅草寺参拝に訪れた人々は、まずこの地に上陸して駒形堂をお参りして、観音堂へと向かった。…今も昔も、この地を行き交う人々をお守りくださっている。

…」とある。「交通の安全を守っている馬頭観音」という、世間受けし易い、本来の馬頭観音と



は繋がらない意味曖昧な説明となっている。英文案内板もはっきりと「交通安全の神」と説明している。他方で、台東区教育委員会の案内板では、交通安全には全く触れておらず、駒形堂の創建年代は942年で、建立者は安房守平公雅などと説明しているだけである。思うに、10世紀半ばには馬頭観音と交通安全や馬の供養を関係付けた考えなどは生まれてなかったのではないかと素人ながら推察する。駒形堂の馬頭観音は秘仏で月の19日に開帳し、観音経をあげている(写真⑩)。

現在、最も馬の世話になっているのは、競馬場であろう。中山競馬場のパドックの傍に、大きな板状の馬頭観音碑と高さ1メートル程の舟形光背付き三面八臂の馬頭観音像(昭和36年造立)がある(写真⑪)。馬の供養のためか、今日一日の賭けで大穴を当てんがためか、かなりの人が合掌している。



<参考資料>

- ・ 「もっと知りたい日本の山」 石井光造 日本実業出版社 1996年11月刊
- ・ 「仏像の見方」 瓜生中 角川ソフィア文庫 平成19年1月刊
- ・ ウィキペディア「馬頭観音」「六道」
- ・ 「原始仏典」 中村元 ちくま学芸文庫 2011年3月刊
- ・ 「広辞苑」 新村出編 岩波書店 1955年5月刊

追記: 後日、御正体山登山の帰途、昭和32年造立の馬頭観音碑を発見。